

リハビリテーション医学・医療の最前線

リハビリテーション医学・医療が確立されてからの歴史は、整形外科学・外傷学に比較すれば浅いものだが、後者とともに前者が歩んできたことは間違いない。米国では第一次世界大戦中に陸軍軍医総督部の下に「身体再建とリハビリテーション部門」が設置され、欧米を中心に第二次世界大戦でさらにリハビリテーション医学・医療が発展した。当時の主な対象は戦傷者であり、脊髄損傷と四肢切断が大多数を占めていた。日本へは第二次世界大戦後にリハビリテーションという言葉が導入され、高度経済成長期に炭鉱落盤事故などの労働災害や交通事故による障害に対するリハビリテーション医療が発展した。その後、労働災害や交通事故の件数は大きく減少したが、一方で日本は超高齢社会を迎え、リハビリテーション医療の対象は高齢者が中心になってきている。近年は少しずつではあるが各大学にリハビリテーション医学講座が誕生しており、高度な医療への参画、医学研究の推進などが進んでいる。

運動器に関係した疾患のリハビリテーション医学・医療は非常に幅広い分野をカバーしており、整形外科学・外傷学の進歩に伴い、リハビリテーション医療がどのようにそれに関わるのか、医学の側面からの研究も積極的に行われている。本企画では、運動器疾患に対する再生医療、変形性関節症や骨粗鬆症、機能的電気刺激、健常者と障がい者のスポーツ、がん、手外科をテーマに、各分野での進歩とリハビリテーション医学・医療との関係を経験豊富な先生方に執筆していただいた。整形外科の診療が手術で終わらないことは、昔も今も同様である。超高齢社会の中で保存的治療に占めるリハビリテーション医療の位置付けは、以前にも増して重要になっている。多くの整形外科医に、運動器に関するリハビリテーション医学・医療の最新の情報を知り、日頃の診療に役立てていただきたい。最後に、御多忙にもかかわらず本特集に寄稿していただいた執筆者の先生方に深謝する。

(芳賀信彦)